Parksepp and Lahvis (2011) に限らず、近年は動物に人間と同様の共感能力があると考える立場が主流となっている。だからこそ本申請の視点は世界的に見て独創的な立場にあるとみなすことができる。少なくとも、これまでの先行研究にはラットの共感能力の存在を確実に示したり、何が共感を示す証拠であり、何がその証拠とは言い切れないかを確立する境界条件の策定を行ったりした研究は見当たらない。それだけではなく、動物が人間と似た共感を示すことを例示したと報告する諸研究で、示された事実が共感を表すと解釈することへの構成概念妥当性を十分に評価した研究は見当たらない。

そもそも研究テーマを選ぶ際に、研究者は専門家のコミュニティに受け入れられるだけではなく、より広い社会全体から注目を受けるテーマを選ぶことが多い。ラットの共感能力を例示したと主張するBartal et al. (2011)やSato et al. (2015) は当然のことながら公的メディアの注目を受けた。軌を一にして、サルや類人猿も人間と類似の共感能力を示すと主張する論文が学術雑誌に掲載されることでラットの共感能力についての主張の影響力は更に重要度を増す。このように様々な種で同じ能力が示されたとみなすことで、共感能力の起源は、多くの動物が共有する古い共通祖先にあるという進化に関する推定へ結実していく (de Waal, 2010)。しかし、公的な注目をうけやすく、また社会及び学会に強い影響を与えそうなテーマであるからこそ、足元の経験的証拠の妥当性を可能な限り高めることは意義を持つはずである。

もし本申請における研究が、十分に妥当なラットの共感に動機づけられた行動を示すならば、これは②で論じた理由から、社会及び学会にとって価値のある学術資源となるであろう。もし、本申請の徹底した研究を通しても、ラットの共感能力を想定するに足る経験的証拠が見つからないことが示された場合には、その能力に関して現在想定されつつある生物進化に関する推論には修正を迫ることになるが、臨床医療上の用途に共感性の動物モデルとしてラットが使用される誤りが起きる可能性を防ぐことに寄与するだろう。

参考サイト

http://www.sciencemag.org/news/2015/05/rats-forsake-chocolate-save-drowning-companion